展 望

世界文化圏の歴史から見た日本の敷物

富 田 典 明*

はじめに

長い歴史において、敷物に込められた人々の生活の知恵や、風土に合わせた文化遺産が今日の住環境の中で脈々と息づいているように思う。

文化形成の歴史を見ると、紀元前45世紀以前からのエジプト銅器時代からエーゲ文明、ギリシャ、ローマへと続くヨーロッパの流れ、又、紀元前30世紀頃からのスメール・バビロニア・古代ペルシャへと進むオリエントの流れ、そしてもうひとつは、全く異なる文化を形成した夏・殷からの中国がある。まぼろしのマヤ文明を除けば、この三大文明が人々の交流と共に、住環境をよくするためにその地域に合わせ、技術を加えることによって、王や貴族から一般の人々へと利用されていく。

人々が暮らしていく上で、敷物は住環境、特に眠りと大きな関係を持っている。しかし、眠りの歴史は、住まいの歴史においてもあまり取上げられておらず、彫刻や絵画、残された先人の文、そして少数の原始生活民族から読まざるを得ないようだ。

今日の日本の住まい方の中においても、敷物はただ単に装飾のためや、ステータスシンボルとして敷かれてはいない。そこには、日本の風土と人々の住まいの歴史からきたものがあり、いかに快適に暮らすかの知恵が育まれているはずである。

こうした観点から、世界の文化の形成、特に人々の住まいとの関係を見た上で、日本住宅における敷物の姿を考えたい。

原始的敷物

動物たちの生き方を見た場合、まず寝床をどう持つかが生きる基本となっている。鳥にしても、枯草や枯葉を集めて巣を作っていく。又、ゴリラなど人

間に近い動物では地上に巣を作らず、ジャングルでの日当たりを考え、木の上に平らな形で作る。木の枝などを使い、できるだけ長い枯草を集め、子供たちを守るための安全性を考えた上でしっかりした巣を作り上げている。

動物たちの快適な巣作りは、湿度をいかに持ち込まないか、又、寒さ暑さをどう調節するかで、動物によって巣の形態が異なるようだ。又、地面行動動物では歩きやすいところが道となり、風雨を避けるため、大樹の下に群ったり、岩陰もしくは、傾斜面に穴を掘って巣を作る。気候の変化、食物の得かたにより、大地を移動する動物たちも多いが、その移動の仕方にも一定のルールがあると聞く。

人間生活においても、快適に寝ることと歩くための工夫がなされている。アフリカのサバンナでは、動物などから身を守るため草で囲いをし、中は枯草の上にカモシカなどの皮を敷いて眠ったし、エスキモーたちにおいても、毛皮は防寒具と共に快適な眠りのための敷物である。樹木の多い地域では、樹皮を加工している。オセアニア、アフリカ、南アメリカでは、桑科の樹皮を原料にし、木槌でたたき伸ばし、たて、よこに重ねては又たたき伸ばした樹皮布（TAPA 又は KAPA＝たたき伸ばすの意味）が作られた。薄手のものは身に着け、厚手のものは敷物に使われた。日本においても、藤づるやコウゾの皮から得た繊維を織ったものが袋物や敷物に使用されているし、全国で加工された樹皮布も多いようだが、残念ながら、加工方法など、今日解っているものはごく僅かである。

ヨーロッパ文化圏

文明発祥の地としてのクレタ、ミケネのエーゲ文明から、ギリシャ、ローマを中心としたヨーロッパ

*N. Tomita, 鐘測化学工業(株)カネカロン事業部

文化の発展は「石材」の豊富さが基本になっている。人々は豊かな水と土地を求めて多くの工夫をしてきたが、農耕においても、石の多い土地から豊かな作物を得るための努力は大変なものであった。岩場でも育つぶどう、荒地に強い麦を上手に育てることによって生まれたフランスのワイン、ドイツのビールなどは、人々の努力が世界的に認められたものである。

ミロのヴィーナス像、ミケランジェロのダビデ像に見られる白く透けるような大理石の数々は、白色人のいきいきとした生活への憧れであった。又、ローマの市街を歩くと、すばらしい石材の彫刻や建築物がいたるところで見られる。これらは、深い歴史の重みを感じさせると同時に、古代ローマの人々の声がそこに響いているかのようである。

古代ローマにおいては、文化面でギリシャを師とし、石材による水道設備を始め、優れた都市施設が数多くあった。人口過密都市では、すでに5～6階の集合住宅に住んでおり、建築行政の手によって高さ制限がなされていたという。

石材の色や石材彫刻の光と影の表現技術は建築にも多く生かされている。切出した石材を積み重ねていく建築においては、縦長の空間展開になり、窓部の取り方も縦の光線導入となる。こうした光線は、室内にリズムを生み出し、床面との装飾の調和へと結び付いている。レンブラント光線に代表されるように絵画においても、立体としての調和と光のリズムを重要視している。

ギリシャ、ローマ文化に影響を与えた紀元前50世紀頃からのエジプト麻（リネン）織物とその技術を生かし、アッシリア、古代ペルシャによって、ウールを用い、カーペットへの展開がヨーロッパへ広がる。麻（リネン）の衣料用織物は、風土と高品質であったことから一般化するのには、イスラム教徒が来住するようになってからで11世紀以後になるが、牧畜にて入手しやすいウール織物は早くから一般の人々に使われてきた。しかし、本格的なカーペットが使われるようになるのは、貴族達が城を出て、「家族のためのハウスづくり」を行った15世紀以後のようだ。家族を中心とした部屋づくりと共に、長い冬場に欠かせない暖房の炉が、壁付き暖炉へと変化することにより、住空間の質は向上する。カーペットが一般化するのもこの頃からで、まず裸足になるベッドサイドに、又、家族が集まる暖炉の前に敷かれることになった。貴族達の高級品に比べて、一般で

は、自分達で織りあげた簡単なピースものを敷いていたようだ。

オリエント文化圏

チグリス、ユーフラティス河を中心としたメソポタミアを始め、イラン、インド、北アフリカ、スペインに至るオリエント文化は自然環境的に「土」(砂)が中心となっている。高温少雨のアラビアでは、植物の生育も悪く、動物も少ない。こうした中で人々は土を焼くことにより、煉瓦や陶器・磁器を作り、これらを積み重ね、張り合わせて、ササン朝のような巨大な宮殿を造り上げている。そしてアケメネス朝の象徴である「ライオンと牡牛」に代表される狩猟レリーフや、戦闘レリーフなどの浮き彫り技術に優れている。一般生活用品においても素焼きの土器により冷たい水を確保する等の知恵が見られる。このように、生活に必要な物を求め、石を砕いたり、土を焼成する中から素晴らしい色を持った原石も発見した。

土石の中から求めた硝子や陶器の製造と共に皮革や織物を染める美しい染料を作り上げた。パテオを中心に、ベットルーム等各部屋が取巻く住宅では、現在のシステム設計を思わせる見事な煉瓦造りが見られる。

又、清涼感溢れる壮大なモスクの寺院に見るブルーを中心としたタイルモザイク技術は、父から子へ伝えられ、美しいパターンをデザインする方式は秘密とされた。このため他の文化に入りこむことなく現在に至っており、オリエント独自の芸術を築いている。

砂漠地帯の土の文化は、強く光を反射させることにより室内の冷気を保とうとする建物を中心となるため、ヨーロッパのような光の取入れ方ではない。風砂を避けるためにも窓は小さく、衣服もチャドルやターバン等その地に合った服装になっている。

オリエントの一小村で発生したキリスト教と共に、オリエント文化はヨーロッパへ広がり、ステンドグラスを始め、種々の文化が色彩感を持って建築などに影響を与えた。

一方、中央アジアで始まった羊毛や毛髪を濡らし、繊維をからませて作ったフェルトやエジプトでの織技術が一体となり、衣料、テント地、敷物として利用されるようになる。

ナイル河を中心としたエジプト、チグリス、ユーフラティス河を中心としたメソポタミア、アーリア

族中心のイラン,そしてインダス河のインド地方は、それぞれが独立した王国を築きながら、経済社会を繁栄させるため牧畜を行った。この羊を追う遊牧民や砂漠に強いラクダによる運搬の人々にとって、テントや寝るための簡易敷物は必需品であった。彼らが一般に用いたものは、防水効果もある羊毛で糸を紡いで60～70 cm 幅に織った布やバザールで買った敷物である。

特に文化交流の中心に位置するイランにおいて有名なペルシャ絨緞は歴史的にも古く、紀元前5世紀頃のものまで判明している。又、原料、羊毛の選別技術、代々伝えられてきた染色技術、モザイクパターンに共通する図柄、それに子供の細い指でしか織れない織技術なども含め、桁はずれの芸術品に育てあげた。これらは歴史の中で各王朝が奨励してきたが、特に16世紀後半、サファビー王朝の保護のもとにイラン経済の根幹をなしている。今日でも、人口の7分の1の人々が絨緞関係にあるといわれる。

中国、日本の文化圏

黄河を中心とした中国から日本の文化は「木」の文化である。水と豊かな土地、それに温暖な気候に恵まれた中国東部から日本にかけては、農耕文化を基本とするには、それほど時間はかからなかった。我々の先祖といわれるモンゴロイド族は、東南アジアを始め北米から南米に至るまで移動している。この種族は戦いを好まず、血縁を大切にしてきた。農耕民族は定住生活が基本となるが、農耕が不安定な

旧石器時代では、動物の移動に合わせて人々も移動したのであろう。そのため石灰岩台地の洞窟や岩陰に住み、狩猟生活と農耕生活を合わせていたと考えられる。

農耕生活が安定してくると、人々は平地の水の豊かな場所に住み、樹木も多い地域であることから、堅穴式住居や高床式住居を集落民が力を合わせて建てていったのはごく自然なことであった。

一方、インドに起こった仏教の教えが中国を経て日本にも伝えられるが、特にカシの木は神聖なものとされ、寺院や神殿などは、大きなカシの木を中心に建設された。

農耕を中心とした生活の中で、人々は種々の木の特性を生かし、日用品はもとより、建築、芸術、思想、哲学に至るまで、「木」を中心に暮らしてきたのである。木材建築は、開放部が大きく取られることから、光の取入れ方は建具の工夫や廂の長さにより調節された。又、湿度の変化に合わせるためには、木組みの工夫や紙が果たした役割が大きい。

東西の文化交流の中心となったシルクロードによって、日用品を始め、芸術、技術、思想、医学等各方面に異文化が活用され、定着したものも多い。

カーペットにおいても、オリエント地方の技術は商品の流れと共に、ヨーロッパや中国に広まり、羊毛を始め高級繊維としての絹は、高価な絨緞として織り上げられている。

ペルシャのような幾何学からきた紋様は難しく、中国絵画に見られる複眼同視点の表現で、風景紋や

表1 三大文化圏の形と色の比較表

	ヨーロッパ文化圏	オリエント文化圏	中国・日本の文化圏
① 基本素材	石の芸術	土の芸術	木の芸術
② 主な素材	大理石	陶器・硝子	杉・檜・柏
③ 主な芸術	建築・彫刻	建築・陶器	建築・仏像
④ 主な芸術形態	丸彫り	陶抜連続文様レリーフ	彩色・絵画
⑤ 主な色素	植物染料	鉱物染料	植物染料
⑥ 主な色体系	モノカラー	ポリカラー	モノカラー
⑦ 重要色	白（＋赤）	青・青緑	白（＋黒）
⑧ 光への態度	光と影を重視	同光度	同光度
⑨ 色の濃淡	光の濃淡による表現	フラット	濃淡の美
⑩ 形の美	量感（ボリューム）	フラット	線の美
⑪ 形の種類	幾何紋様	唐草幾何紋様	風景・草花紋様
⑫ 遠近法	遠近法	フラット	複眼同視点
⑬ 自然への対応	自然を克服	自然を加工	自然と融和

(城一夫著「色彩の歴史(3)」より)

草花紋が中心の紋様となった。

但し、日本では、海に囲まれているためにヨーロッパ文化やオリエント文化が直接流入することはほとんどなく、木の文化として独自のものを形成した。

日本の住宅と敷物

日本の住まいには、縄文時代に生まれた北方系の竪穴住居と弥生時代以後に広まった南方系の高床式住居の2つの源流があるとされ、現代の農家の土間は竪穴住居の名残りといわれる。

奈良時代には、仏教を中心に大陸文化が伝来し、支配階層では住居も板床、桧皮葺き、妻側に縁を持つようになる。

平安初期から室町時代にかけて、高床式住居から貴族の寝殿造り、武家の書院造り、畳部屋へと変化していく。寝殿造りの内部は極めて開放的な空間となっており、必要に応じてびょうぶなどで間仕切りを設けた。床は板敷で身分に応じて位置や敷物を使い分けていた。書院造りの書院、床の間、玄関の造りはやがて町家や農家に広がり、寝殿造りの敷物の考え方も合わせ、今日のライフスタイルの基礎となっている。渋谷敬治さんの長年の研究から見ていくと、「日本書紀」の中で、天照大皇神がアメノオシホミミノ尊に対し、「……真の床を同にし、^{みあらか}殿^{ひとつ}を共にして……」とあるように床は寝所であり、殿は高床式の建物を指すことから、住まいの中では履物は脱いで入り、敷物で休んだと考えられる。この時の敷物は、コモ（薦・菰・蔣）といわれる荒織りのムシロであり、ワラゴモは下級品であったようだ。ムシロ（筵・蓆）は、形、大きさ、素材、用途も多種多様であり、畳表に縁取りをした寝ゴザの類を指した。

伊勢物語・六十三段

さむしろに衣かたしき今宵もや

恋しき人に逢はでのみ寝む

この歌のような狭むしろの他、藁むしろ、萱むしろなどと詠まれ、種々あったことがわかる。

タタミはもともと寝具に比重のかかった敷物で、初期のものはムシロのようなものを3～4枚合わせたものと考えられる。室町時代には、書院造りの前身としての間仕切りの増加という現象があり、杉戸・襖・明障子等の建具の発達と共に、タタミも今日の畳に近くなり、屋内の天井張りに合わせ、小部屋はすべて畳敷きになる。

日本の風土が育んだ畳においても、春夏秋冬の四

季がはっきりした農耕民の知恵で湿度に対応しやすい厚さ、保温性とさわやかさを保つ床の高さに加え、衛生的なものとなっている。又、畳には空気の浄化作用があることはあまり知られていない。

木造建築は一般的に高層にすることは困難であり、平屋造りが中心となる。又、開口部が広く取れることから外観を室内に取り入れ四季を楽しむようになった。これは1枚の絵を見るようで、日本庭園が世界的に認められたのも、日本人の大自然に対する価値感と哲学、それに畳文化の芸術性にある。

近代産業と住環境

明治維新により、それまで人権を無視されてきた人々の生活はもはや過去のものとなり、人間生活が開花することとなる。

産業や社会が、今までの封建社会から近代的な欧米の影響を受けて進む中で人々の生活はなかなか近代化されなかった。これは江戸時代の武士の伝統であった接客本位の間取りが良しとされたため、本来住生活を行う部分が犠牲にされたためである。

明治中期以後、自由経済となり、商工業は資本主義化への道を邁進することになるが、それを支える人々の生活環境は歴史的背景からもなかなか向上しなかった。

一般の人々の住まいの中で、畳敷きの部屋が完備されていたわけではなく、ムシロやゴザの上に万年床の綿布団が敷きっぱなしになったことも一因であるが、依然として快適な生活のために重要な寝室が陰のへやに位置づけられたためである。

第一次世界大戦後、「生活改善運動」が起こった結果、接客本位の住まい方から家族本位へと移っていった。今日でもその形態が見られるが、中廊下によって各室の独立性を保つ型が都市の中産階級から広く普及し、客間を洋風化する傾向が強くなった。しかし、欧米での各室の独立性を保つ真意であるプライベートの確保という意味ではなく、部屋の形態を仕切ったに過ぎなかった。

大正12年の関東大震災により、住宅問題は大規模な運動に結び付くが、結果は「文化住宅」と称したモルタル壁にガラス窓、木の床張りの洋風共同住宅であり、テーブルと椅子の生活であったため、従来の日本人の高床・畳の生活習慣から広くいき渡らなかった。

第二次世界大戦後、住まいを私的な空間と公的な空間に分ける構成は、家族生活の合理性という面で

都合のよい型であり、モダンリビングとして人々に受け入れられ、木の床には、ビースものを敷くのが一般的になった。その後、核家族化、団塊の世代の住宅難により、大量の集合住宅が建設され、今日の都市型マンションの定着へと進む。

一方、床面はそれまでアメリカを中心とする高級ホテルや空港などで採用されていた敷きめカーペット方式が集合住宅にも取入れられた。和室以外の寝室や子供部屋を始め家族が集まる居間にカーペットを敷詰めた住まいは、都市から地方にまで広まっていった。

木の文化、高床式住居の中で育まれた日本人のライフスタイルは、素足の住まい方であり、「座」の生活である。オリエントや欧米のような靴の生活でない日本人には、形態だけを真似た住環境と実生活の間にひずみを感じている。

次世代のために

個人と家族、社会と住環境など、人が生きるものの意味、次世代にすべきこと、本当の幸せの見直し、世界における日本のあり方等人間生活の真の価値が問われ出した。

一億総中流意識の中で、ニューリッチ、ニューブアーが生じている。日本人の所得は、実態とはかなりかけ離れているにもかかわらず、数字の上では世界のトップレベルに達した。昨年は国際居住年に当たり、国際比較や今後の住まいのあり方などいろいろな論じられていた。日本の住宅は「ウサギ小屋」であるとか、「ウサギの穴」とまで評されている。これは過去における住宅政策の問題であり、又、人々の心の問題でもある。

住まいを眠る場所と位置付けるか、社会の基本的な場とするかによって全く異なってくる。日本の住宅面積は昭和58年に平均85.9 m²であるが、持家111.7 m²、貸家42.9 m²が示すようにこの差が大きい。持家比率は、62.4%と高いが、建設省が進める最低居住水準（4人世帯専有面積50 m²）及び、誘導居住水準（同、123 m²、都市型91 m²）に比べても隔たりが大きい。

都市型マンションは、高層化する一方で防災を含むメンテナンスを始め、高層に住むことにより起こるストレス、子供達への影響、老人への対応など、いろいろな問題が提起され、過渡期の形相を呈している。

さらに、今日問題になりつつある65才以上の高齢

者も21世紀には、総人口比15%以上となり世界一の長寿国と予測されている。こうした中で、同居を望む人は45.2%（現状27.2%が同居）に対し、現実にはシングル世帯が増えている。住居面で見れば、高齢者は畳の部屋といった考え方が強いが、脚の衰え等を考えると、寝るのはベッドの方が好ましいし、自然との接触や社会的な刺激を適度に与える方がよい。文化施設やスポーツ施設が多くなると共に交通の面も便利になっていくが、脚と床素材の関係はまだだである。

インテリア心理学として、住居の広さ、間取り、窓の大きさ、天井の高さ、内装の色彩計画等と共に、

図1 日本の気候分布図
(日本の住まい、図説経済教育資料より)

表2 人口高令化の国際比較
(日本の住まい、図説経済教育資料より)

表3 住宅水準の国際比較

	整備指数	単位	日 本	イギリス	西ドイツ	フランス	アメリカ
住宅	一戸当り平均室数	室	(1983) 4.7	(1981) *1 5.0	(1978) 4.5	(1978) 3.7	(1983) *2 5.3
	一室当り平均人員数	人	(1985) 0.71	(1981) *1 0.5	(1978) 0.6	(1978) 0.75	(1983) *2 0.5
	一戸当り床面積	m ²	(1985) 83.1	—	(1984) 90.0	(1983) 88.6	(1984) 134.8

(※1 イングランド・ウェールズ, ※2 建設省推計, 日本の住まい (図説) 経済教育資料より)

表4 共同住宅非木造住宅

全国住宅総数: 34,704,500 (昭58年)

種 類	総 戸 数	6 階～10階	11階以上
専用住宅	(26.46%) 9,181,800	(9.17%) 842,400	(6.12%) 562,100
持ち家	1,131,900	386,900	239,300
公営の借家	1,128,000	84,400	114,600
公団・公社の借家	756,100	64,100	128,700
民営の借家 (設備共同)	3,993,200	237,400	52,400
民営の借家 (設備共同)	92,400	1,800	900
給与住宅	1,915,100	68,100	25,500

(「住宅統計調査」より)

日本が亜熱帯地方から亜寒帯地方にまたがる気候の違いがある。又、降水量、湿度の違いによってインテリアの構成素材も異なるのが当然と思う。

現代の若者の志向は、フローライフといわれ、フローファニチャーがよく売れている。狭い空間を効率的に使うことと、部屋が広く感じられる点に価値を見出しているようだ。そして、数物はピースものを効果的に使っている。

又、高度情報化社会の中で、職場でのカーベットの価値感を見直したり、教育機関等では、情緒の安定をはかるなどの目的で、それぞれ敷かれる所が増えてきている。

こうした数物に対する関心から、ライフステージに合わせた商品展開が必要となり、インテリアにおけるハード面の開発だけでなく、使用者の心理を踏まえてソフト面を導入した商品が市場で待たれている。

結びとして

日本では、四季の変化が明確であるため、季語の

豊富さに見るように、環境に対する順応性が優れている。そして、そこから生まれた文化遺産は、世界から注目を集めると共に、日本人の頭脳の展開にはすばらしいものが多い。伝統を重んじる欧米には学ぶことも多いが、日本人が育んできた住まいに対する知恵を生かした商品開発は、明日の豊かな生活に結び付けられると信じている。

追記

本学会、「生活環境と繊維の研究会」の一員として書くにはあまりにも心苦しく思うが、今後の活動の一助となればとの思いで問題提起として執筆した次第である。

参考文献

- 山口 廣：目で見える住まいの歴史 (井上書院)
 渋谷敬治：ねむりと寝具の歴史 (日本寝装新聞社)
 ジェームズ・レーヴァー著、飯田晴康監修、中川 見訳：
 西洋服装史、洋販出版株式会社
 COLOR DESIGN, No.360, P.34, (財)日本繊維意匠センター、
 (1984-2)
 日本の住まい—図説・経済教育資料, No.97, (財)日本経済教育センター